木下杢太郎全集

第十八卷

木下李太郎全集 第十八巻 第二二回配本(全二十五巻)

一九八三年二月一八日 発行

定価 三七〇〇円

著者 太田正雄

発行者 緑川亨

発行所 〒101 東京都千代田区一ツ橋二-五-五 株式会社 岩波書店
電話 〇三(二六五)四一一一
振替 東京六-二六二四〇

印刷・三秀舎 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© 太田元吉 1983 Printed in Japan

目　次

科學と藝術……一
明治末年の南蠻文學……三
「富貴眞臘」聞見談……二
安南における國語國字問題……一七
水野清一、長廣敏雄共著「龍門石窟の研究」……三八
岡本良知氏譯「九州三侯遣歐使節行記」……四一
「九州三侯遣歐使節行記」……四四
耶蘇會士アレクサンドル・ド・ロオデ……五一
南方醫學覺帳……七九
雲崗と方山……九三
大同より……九八

雲崗石佛寺の今昔……一〇〇
南方に關する書……一二七
「寒雲」「曉紅」「白桃」……一三〇
白秋君を悼む……一三四
北原白秋のおもかげ……一三六
本の裝釘……一三五
杏林逸話……一五〇
「漱石の藝術」……一五七
北原白秋君……一六三
龍宮の美玉……一六八
南方諸國に於ける從來の醫療及び醫學研究の機關……一六九
芭蕉と現代の生活……一九三
「佛領印度支那」……二〇八
會員鈴木武雄君ノ戰死ヲ悼ム……二〇九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

親試實驗……二一〇
皇漢醫學……二二五
高橋信吉教授ヲ弔フ……二三〇
天平時代の佛像に對する斷片的考察……二三二
古典に就いて……二五五
日本醫學史に於ける古方家……二五八
雲崗石佛群……二八一
俳文學論考……二八三
鷗外舊宅の燒失……二八六
東洋の道……二八七
すかんぽ……二九〇
森鷗外の文學……三〇一
森鷗外博士の「訂正オルフェウス」……三二二
藥袋も無き事ども……三一九

日本醫學史概要……三三五
後　記……四一五

科學と藝術

其の結果は違ふが、其の生成に於ては科學研究と藝術的創作とかなり相似たものがある。孰れも第一に、まだ持つてゐないものを作り出さうと欲望する。そして強い空想力が手段と過程とを離れて、其の結果の幻影を形作る。レオナルドオ・ダ・ヰンチが飛行機の設計圖を作つたといふが、それは科學的と判ずべきか、藝術的と判ずべきか、恐らく其の兩者の混淆したものであらう。空想力の弱い人は大きな藝術を創作することが出來ないやうに、科學の新境を開拓することも出來ない。空想力は長く持續しなければならない。人間は醒めてゐる時だけ考へるのではない。日中其の考察に澤山の材料を與へて置くと、睡眠の間に、考察の生理化學が、意識の閾下で不可思議なる醱酵をして、頭腦を、物質の結晶する前の溶液のやうな狀態に置く。其の尖の一角が意識閾の上に頭を出すと、それをきつかけとして、意識のうちにによきによきと結晶が蜂起するのである。

かくの如き心理作用は科學的研究の過程に於ても、藝術的創作の過程に於ても共通である。唯、兩者は其の手段と其の技術と、其の目的とを異にするばかりである。

科學も藝術も其の結果は、世界的のものであり、人道的のものである。然し、其の研究、其の創作は、研究者、創作者の精神の統覺に依從する。其の統覺は國土、時代、國民性から影響せられる。熱烈なる愛國者から生れる科學、藝術の果實も、其の眞正なるもの、其の佳良なるものは、やがて世界的であり、人道的であり、兩者に何等の矛盾はない。それ等の結果を取つて之を特殊の目的に利用するといふことは、これは別の事である。

明治末年の南蠻文學

明治末年の南蠻文學と云つても、唯我々が關係した極狹い範圍の事しか申上げられません。ここに南蠻文學と云ふのは、日本の初期吉利支丹、或は其頃のポルツガル、エスパニヤの人々などの事を取り入れた詩、戲曲の事を指すのです。我々の關係した創作の範圍内では、それは少しも文獻學的のものではなく、ただ異國趣味的乃至ロマンチツク的のもので、そして全く自發的に興つたものです。

無論それが興る雰圍氣はあつたのです。わたくしは此原稿を今夜の二時間のうちに書き上げなければならないのですから、身の廻りの資料を捜し出して考覈する餘裕さへありません。全く疎漏な記憶を便りにするのですから、甚だ杜撰且つ、自己本位のものとなりませう。此點御諒恕を願ひます。

わたくしに在つては、明治四十二年(?)に横濱で開かれた、横濱開港五十年祭の資料展覽會がこの方面に對する興味を誘ふ重要なものだつたのです。其時の展覽會の目錄はつひ無くしましたが、

そこで始めて南蠻屏風といふものを見ました。ジエズイツト僧のやうな服裝の人の間にポルツガル人らしいのが雜つてゐたり、又かけぎぬを被つた女、短い羽織を着た男なども畫かれてありました。黑い高い帽子、黑いカツパ、赤いズボンを穿つたヨオロツパ人が日本の扇子を持つて踊を踊つてゐるのもありました。又、支倉六右衞門が十字架の前に合掌してゐる處を畫いた油繪も出品されました。銅版畫には長崎丸山の酒樓から遠日金で海を眺めるヨオロツパ人、その傍に坐る妓女を現はしたものもありました。寛永元年版島原記の插繪もありました。懸物の前に五六人の人が跪坐して禮拜してゐる處です。それらはスケツチブツクに寫して置きましたから、今はつきりと思ひ出すことが出來るのです。

かう云ふ展覽會は偶然開かれるわけのものではなく、學者、歷史家のうちには夙くにかう云ふ方面への興味が高まつてゐたからなのでせう。大學では村上直次郎博士がずつと前から、初期の日歐の關係などを講義せられてゐました。昭和六年發行の濱田靑陵博士の「天正遣歐使節記」の序文には「私は此遣歐使節に就いて始めて知るを得たのは、二十餘年前東京帝國大學の學生であつた頃、村上直次郎博士の講義に參じた時であつて、當時深く私の心を動かした。」と書いてあります。

殘念ながら我々はそんな事は少しも知りませんでした。又史學の雜誌などへ出たさういふ關係の論文なども見て居りませんでした。それ故われわれの狹い仲間の間に起つた南蠻文學は全く自發的

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

であつたのですが、然し其時代の學的雰圍氣をいつか吸收してゐたのでせう。新聞とか演說とか何かで。今はさういふ意識がありませんで、唯はつきりと回想せられるのは横濱の展覽會の事だけです。

われわれの間に「南蠻」に對する異國趣味の起つたのは又偶然の機會からです。明治四十年の夏、わたくしは醫科大學の第一年の第一學期を終つた時でしたが、其時與謝野寛先生を指南として、平野萬里、吉井勇、北原白秋等新詩社の青年が九州旅行をしました。わたくしも之に加はりました。わたくしの古い手帖には次のやうな會話が寫してあります。少し馬鹿馬鹿しい事ですが、再錄して見ませう。

「昨日面白いことを聞いた。アプサン酒は、咽まで來ると音樂を奏するさうだ。」

「アプサン？」

「昨日新詩社へ行つたら、蒲原さんが來て居てそんな話をした。」

「う、新聞に出てゐた。蒲原さんて人と岩野泡鳴とアプサンを買つて、人を引つぱつて來てそれを飲んださうだ。サムボリストの詩人には附きものだと見える。」

「そんな事が出てゐたか。今度新詩社の連中が九州の方に行くんだつて。そしてアプサンを下げて行くんだつて。」(明治四十年七月八日。)

アプサンこそ下げて行きませんでしたが、我々は七月の末から九州旅行を始めました。その先々から記事を作つて二六新報に送りました。「五足の草鞋」といふのが其標題でしたが、殘念ながらこの切拔は無くしてしまひました。七月三十一日福岡、八月一日柳河(北原白秋の故郷)、三日佐賀、四日唐津、五日名護屋、六日平戸、九日長崎、十日小濱、十一日島原、十四日天草、二十日霧島、二十二日人吉、二十四日阿蘇、二十六日熊本といふやうな旅程でした。

わたくしは旅行に先つて、上野の圖書館に通ひ、殊に天草騷動に關する數種の雜書を漁り、且つ拔書をして置きました。二三年前ゲエテのイタリア紀行を讀み、それに心醉してゐましたから、さういふ見方で九州を見てやらうといふ下心でした。

九州から歸つてわたくしは明星に「長崎ぶり」とか「黑船」とか「棧留縞」とかの短詩を寄せました。其翌月、北原白秋君があの「邪宗門」に出て來るけんらんたるかずかずの異國情調的の詩を發表しました。これがわれわれの間の「南蠻文學」のはじまりでした。

當時東京帝國大學の圖書館にはバルトリイの「耶蘇會東洋傳教史」がありました。其他グスマンもソリエもシャルヲワも有つたでせうが、殘念ながらわれわれにはそれに取りつくだけの用意がありませんでした。唯いま北海道に居る同學の山崎春雄君が、「ヒデスの導師」をここで發見し、その表紙繪をわれわれが四五人で出した二號雜誌「屋上庭園」にのせたことがあります。然しそんな

ものに學問的の好奇心を寄せるまでにわれわれの吉利支丹學は熟してゐませんでした。

そしてわたくし自身の爲事としては、上野の圖書館などに行つて、「日本西教史」「日本聖人鮮血遺書」「南蠻寺興廢記」「瓊浦日記」「長崎紀行」「長崎港草」「阿蘭陀紀聞」「磐水夜話」「長崎實錄大成」「長崎土產」「天竺物語」「西洋紀聞」「バタン國物語」「安南紀略稿」「天馬異聞」「島原紀」といふやうな本の外に「舍密開宗」だの西川如見先生の著書などをあさり、それに出て來るめづらしい言葉や短い插話をさがし出すことでした。また江戸に關する古書、浮世繪の繪本、そんなものを見にゆきました。帝大圖書館の別置の繪本類は大半かりて見ました。

そして北原白秋君、長田秀雄君の家などに集り夜は鴻の巢といふ小さい西洋料理屋などに行き、ひるまのうちに讀んだものを醱酵させて家にかへつて詩に作りました。然しわたくしは寧ろ材料を集める方で、どうもうまくそれが詩に醱酵しませんでしたが、北原白秋君はそんな語彙を不思議な織物に織り上げました。白秋君の詩には思想的聯絡がなく、所謂言葉のサラドといふもので、我々は之を刺繡の裏面の紋樣にたとへました。

かういふ風なわけでわれわれの南蠻趣味は學問的でも、考證的でも、また純粹のものでもなく、專ら語彙の集積でした。是れは當時日本に紹介せられたパルナシアンの詩、サムボリストの詩からも暗示を受けたわけです。上田敏氏の「海潮音」、蒲原有明氏の「春鳥集」がわれわれに大きな影

響を與へました。

も一つはフランスの印象派に對するわれわれの偏愛が、その流義を詩の上で表現せしめたといふこともあるのです。

南蠻紅毛趣味、江戸浮世繪趣味、印象派の樣式――さういふものがわれわれの南蠻文學の基本調でした。

何かの本でリヒヤルト・シトラウスの「ツアラツストラ」のオルケストラの詳しい評釋が出てゐまして、それから暗示を得てわたくしは南蠻寺門前といふ戲曲を作りました。實は戲曲の統一はなくオルケストラの流轉を目指したものです。それ故に小山內薰君から筋立が支離滅裂だと批評されました。

其頃既に京都大學では南蠻學が講究せられてゐました。明治末年から大正にかけての事だつたでせうが、上田敏博士、新村出博士などが、日本で印行せられた吉利支丹本やぱどれたちの事報などに興味を持つて研究せられました。然しわたくしは大學を卒業し、醫局に入り、だんだん文學から遠離しました。そして大正五年に滿洲に渡り、南蠻とは全く緣を切りました。滿洲では隙な夜は佛教美術に關する本などを讀みました。

その間に或日ふと雜誌を讀むと、芥川龍之介君の南蠻文學の批評が出て居り、それがわれわれの

過去の南蠻文學と比較せられ、われわれのものは無知な異國趣味、ロマンチズムであつたと酷評せられてゐました。

それは全く其通りで怒る氣もしませんでした。芥川君の時はもはや京都の南蠻學が實を結んで、それに興味を持つ人は、當時まだ比較的數の少かつたさういふ研究の源泉を掬することも出來たのです。われわれの南蠻文學はそんな事は全く知らず、いはば自發的に湧き出したもので、それを學問的に仕立て上げるなどといふ氣もなく力もなかつたのでした。

わたくしは大正九年ヨオロツパに行き三年半そこに留まりました。その間に東京には大地震が起り、わたくしの神田の親類の家も類燒し、わたくしが支那で集めた少しばかりの本も無くなつたので、また南蠻の事に近づいて見ようと考へ、大正十三年夏、日本に歸る前にエスパニヤ、ポルツガルに旅行しました。すると珍しい寫本刊行物がたやすく目に觸れ、そのうちには日本の學者が今まであまり注意しなかつたやうなのもあつたりするので、少しばかりそれを寫したりしました。

日本に歸つても京都帝大の圖書館から借りてルイス・フロイスの年報などを讀みました。わたくしは始めそんなものから創作の材料を捜すつもりで、やはり氣にするともなく疇昔の批評家の手ひどい批評を氣にした結果だつたでせう。所が實際さういふものを讀みあさつてゆくと、それをまづい創作の形にゆがめるのは勿體ない氣がして、そして横道ながら南蠻學に指を染めました。

それもこの十年は本業に追はれ再び打捨ててしまひました。そして今ではもはや創作文學としての南蠻文學ははやりからそれてしまひました。

資料が散逸しましたから、つひやはり自分の事ばかり述べてしまひました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c